

夏目漱石

作物の批評



# 作物の批評



中学には中学の課目があり、高等学校には高等学校の課目があつて、これを修了せねば卒業の資格はないとしてある。その課目の数やその按排あんばいの順は皆文部省が制定するのだから各担任の教師は委託をうけたる学問をその時間の範囲内においてでき得うるかぎりの力を尽すべきが至当といわねばならぬ。

しかるに各課担任の教師はその学問の専門家であるがため、専門以外の部門に無識にして無頓着むとんじやくなるがため、自己研究の題目と他人教授の課業との権衡けんこうを見るの明な

きがため、往々わが範囲以外に飛び超えて、わが学問の有効を、他の領域内に侵入してまでも主張しようとすることがある。たとえば英語の教師が英語に熱心なるのあまり学生を鞭撻して、地理数学の研修に利用すべき当然の時間を割いてまでも難句集を暗誦させるようなものである。たゞにそれのみではない、わが専攻する課目のほか、わが担任する授業のほかには天下また一の力を用いるに足るものなきを吹聴し来るのである。吹聴し来るだけならまだいい。果はあらゆる他の課目を罵倒し去るのである。

かゝる行動に出<sup>い</sup>ずる人のなかで、相当の論<sup>い</sup>拠<sup>あ</sup>があつて公然文部省所定の課目に服せぬものはこゝに引<sup>ひ</sup>き合<sup>あ</sup>ひに出<sup>い</sup>すかぎりではない。それほどの見識のある人ならば結構である。四角に仕切つた芝居小屋の枡見<sup>ますみ</sup>たような時間割のなかに立て籠<sup>こも</sup>つて、土竜<sup>もぐら</sup>のごとく働いている教師よりはるかに結構である。しかし英語だけの本城<sup>しやうがい</sup>に生涯<sup>しやうがい</sup>の尻<sup>しり</sup>を落ちつけるのみならず、櫓<sup>やぐら</sup>から首を出して天下の形勢を視察するほどの能力さえなきものが、いたずらに自尊の念と固陋<sup>ころう</sup>の見を縋<sup>よ</sup>り合<sup>あ</sup>せたるごとき没分曉<sup>むち</sup>の鞭<sup>むち</sup>を振つて学生を精根のつゞく限りたゞいたなら、見<sup>み</sup>じめなの

は学生である。熱心は敬服すべきである。精神は嘉よみすべきである。その善意的なるもまた多とすべきである。あるにもかゝらず学生は迷惑である。当該課目における知識が欠乏するためではない、当該課目以外の知識が全然欠乏しているからである。ただ欠乏しているからではない。その結果として入らぬところまでのさばり出て、要もない課目を打ちのめさねば已やまぬ底ていの勇氣があるから迷惑なのである。

これ等らの人は自己の主張を守るの点において志士である。主張を貫かんとするの点において勇士である。主張



の長所を認むるの点において知者である。他意なく人の  
 ために尽さんとするの点において善人である。たゞ自他  
 の関係を知らず、目を全局に注ぐあたわざるがため、わ  
 が縄張りを設けて、いゝ加減なところに幅を利かして満  
 足すべきところを、足に任せて天下を横行して、憚ら  
 ぬのが災になる。人が咎めればいう。おれの地面と君の  
 地面との境はどこだ。境は自分がきめぬだけで、人のほ  
 うではとうから定めている。再び咎めればいう。このと  
 おり足が達者でどこへでも歩いてゆかれるじやないか。  
 足の達者なのは御意のとおりである。足に任せて人の畠

を荒らされては困るといふのである。かの志士といい、勇士といい、知者といい、善人といわれたるものもこゝにおいてかたちまちに浪人ろうにんとなり、暴士となり、盲者となり、悪人となる。

今の評家のあるものは、ある点においてこの教師に似ていると思う。もつとも尊敬すべき言語をもつて評家を翻訳すれば教師である。もつとも謙遜けんそんしたる意義において作家を解釈すれば生徒である。生徒の点数は教師によつて定まる。生徒の父兄朋友ほうゆうといえどもこの権利をいかんともしることができん。学業の成績せいせきは一いつに教師の判断

に任せて、不平をさしはさまざるのみならず、かえつてこれによつて彼等<sup>ら</sup>の優劣を定めんとしつゝある。一般の世間が評家に望むところはまさにこれにほかならぬ。

たゞ学校の教師には専門がある。担任がある。評家はこゝまで発達しておらぬ。たまには詩のみ評するもの、劇のみ品するものもあるが、しかしそれすら寥々<sup>りょうりょう</sup>たるものである。のみならずこれ等の分類は形式に属する分類であるから、専門として独立する価値があるかないかすでに疑問である。して見ると、つまりは純文学の批評家は純文学の方面に関するあらゆる創作を検閲して採点

しつゝあることになる。前例を布<sup>ふ</sup>衍<sup>えん</sup>していうと地理、数学、物理、歴史、語学の試験をたゞ一人<sup>ひとり</sup>で担任すると同様な結果になる。

純文学といえはなはだ単簡である。しかしその内容を論ずれば千差万別である。実は文学の標<sup>ひょう</sup>榜<sup>ぼう</sup>するところは何と何でその表現し得<sup>う</sup>る題目はいかなる範囲に跨<sup>また</sup>がって、その人を動かす点は幾か条あつて、これ等が未来の開化に触<sup>ふ</sup>るときどこまで押<sup>お</sup>拈<sup>し</sup>げ得<sup>え</sup>るものであるか、いまだ何人<sup>なんびと</sup>も組織的に研究したものがおらんのである。またすこぶるできにくいのである。

こういうては分らんかもしらぬ。例を挙げて二三を語ればすぐに合点がゆく。古い話であるが昔しの人には劇の三統一ということを必要条件のように説いた。ところが沙翁の劇はこれを破っている。しかも立派にできている。してみると統一が劇の必要であるという趣味から沙翁の作物を見れば失望するにきまっている。あるいは駄作になるかもしれぬ。しかしこれがために統一論の価値がなくなつたのではない。その価値がモジフハイされたのであると思う。だからこの条件を充たした劇を見ればやはりそれなりに面白い。その代り沙翁の劇を賞翫する態

度でかゝってはならぬ。読者のほうで融通を利<sup>き</sup>かして、その作物と同じ平面に立つだけの余裕がなくてはならぬ。ほかに一例をあげる。また沙翁<sup>ひきあい</sup>を引合に出すが、あの男のかいたものはすごぶる乱暴なところがある。劇の一段<sup>シーン</sup>がたった五六行で、始まるかと思うとすぐ仕舞<sup>しま</sup>わねばならぬと思うのに、作者は大胆にも平気でいくらでも、こんな連鎖<sup>みじ</sup>を設けている。むろんマクベスの発端のように行数は短<sup>みじ</sup>かくても、興味のうえにおいて全篇を貫く重みのあるものは論外であるが、平々凡々たるしかも十行内外の一段を設けるのは、話しの続きをあらわすため<sup>やむ</sup>已

を得ず挿入そうにゆうしたのだと見え透すくように思われる。換言すれば彼の戯曲のあるものは齟齬しやくまくの組織において明あきらかに比例を失している。だから比例だけを眼中に置いてマ  
ーチャント・オブ・ヴェニスを読むものは必ず失敗の作  
だというだろう。マーチャント・オブ・ヴェニスはこの  
点から読むべきものでないということがわかる。また沙  
翁を引き合に出す。オセロは四大悲劇の一である。しか  
し読んでけっして好い感じの起るものではない。不愉快  
である。(今はその理由を説明する余地がないから略す)。  
もし感じ一方をもってあの作に対すれば全然愚作であ

る。さいわいにしてオセロは事件の総合と人格の発展が非常にうまく配合されてしぜんと悲劇に運び去る手際が<sup>てぎわ</sup>ある。読者はそれを見ればいい。日本の芝居の仕組<sup>しくみ</sup>は支離滅裂である。馬鹿<sup>ばか</sup>々々しい。結構とか性格とかいう点からあれを見たならば抱腹するのが多いだろう。しかし幕に変化がある。出来事<sup>できごと</sup>が走馬灯のごとく人を驚かして続々出る。こゝだけを面白がって、そのほかを忘れていればやはりいくぶんの興味がある。一九<sup>いっく</sup>は御覧のとおりの作者である。一九を読んで崇高の感がないというのは非難しようもない。崇高の感がないから排斥すべしとい



うのは、文学と崇高の感と内容において全部一致したあかつきでなければいえぬことである。一九に点を与えるときには滑稽こっけいが下卑であるから五十とか、諧謔かいぎやくが自然だから九十とかきめなければならぬ。メリメのカルメンはカルメンという女性を描いて躍然たらしめている。あれを読んで人生問題の根元に触れていないから駄作ださくだといふのは数学の先生が英語の答案を見て方程式にあてはまらないから落第だというようなものである。デフォーは一種の写実家である。ロビンソンクルーザーを読んでテニソンのイノック・アーデンのように詩趣がないとい

う。こゝまではなるほどと降参せねばならぬ。しかしそれだからロビンソンクルーソーは作物にならないというのは歌麿うたまるの風俗画には美人があるが、ギド・レニのマグダレンは女になっておらんと主張するようなものである。——例を挙げれば際限がないから已める。

作家が評家に呈出する答案はかくのごとく多種多面である。評家は中学の教師のごとく部門をわけて採点するかまたは一人で物理、数学、地理、歴史の智識を兼ねなければならぬ。今の評家は後者である。いやしくも評家であつて、専門の分岐せぬ今の世に立つからには、多様

の作家が呈出する答案を検閲するときの方<sup>あた</sup>つて、  
いろく<sup>か</sup>に立場を易えて、作家の精神を汲<sup>く</sup>まねばならぬ。  
融通のきかぬ一本調子の趣味に固執して、その趣味以外  
の作物を一気に抹殺<sup>まっさつ</sup>せんとするのは、英語の教師が物理、  
化学、歴史を受け持ちながら、すべての答案を英語の尺  
度で採点してしまうと一般である。その尺度に合せざる  
作家はことごとく落第の悲運に際会せざるを得ない。世  
間は学校の採点を信ずるごとく、評家を信ずるの極つい  
にその落第を当然と認定するに至るだろう。

こゝにおいて評家の責任が起る。評家はまず世間と作

家とに向つて文学はいかなる者ぞという解決を与えねばむかならん。文学上の述作を批判するに方つて（詩は詩、劇は劇、小説は小説、すべてに共有なる点は共有なる点として）批判すべき条項を明かに備えねばならぬ。あたかも中学及び高等学校の規定が何と何と、これくゝとを修め得ざるものは学生にあらずと宣告するがごとくせねばならん。この条項を備えたる評家はこの条項中のあるものについて百より〇に至るまでの点数を作家に付与せねばならん。この条項のうちわが趣味の欠乏して自己に答案を検査するの資格なしと思惟するときには作家と世間と

に遠慮して点数を付与する事を差し控えねばならん。評家は自己の得意なる趣味において専門教師と同等の権力を有するを得べきも、その縄張なわばり以外の諸点においては知らぬ、わからぬといひ切るか、または何事をもいわぬが礼であり、徳義である。

これ等の条項を机の上に貼り付けるのは、学校の教師が、学校の課目全体を承知のうえで、自己の受持に当るようなもので、自他の関係を明かにして、文学の全体を一目に見渡すと同時に、自己の立脚地を知るの便宜になる。今の評家はこの便宜を認めていない。認めても作つ

ていない。たゞ手<sup>て</sup>当<sup>あた</sup>り次第にやる。述作に対すると思いついたことをいゝ加減に述べる。だから評し尽したのか、まだ残っているのか当人にも判然しない。西洋も日本も同じことである。

これ等の条項を遺憾なく揃<sup>そろ</sup>えるためには過去の文学を材料とせねばならぬ。過去の批評を一括してその変遷を知らねばならぬ。したがって上下数千年に涉<sup>わた</sup>って抽象的の工夫を費やさねばならぬ。右から見ている人と左から眺<sup>なが</sup>めている人との関係を同じ平面にあつめて比較せねばならぬ。昔の人の述作した精神と、今の人の支配を受く

る潮流とを地図のように指し示さねばならぬ。要するに一人の事業ではない。一日の事業でもない。

この条項を備えたる人にしてはじめて、この条項中に差等をつけることを考えてもよいと思う。人力も人を載せる。電車も人も載せる。両者を知ったものがはじめて両者の利害長短を比較するの権利を享ける。中学の課目は数において極ま<sup>き</sup>っている。時間の多少は一樣ではない。必要の度の高い英語のごときは比較的多くの時間を占領している。批評の条項についても諸人の合意でこれ等の高下を定めることができるかもしれぬ。(できぬかもし

れぬ)。崇高感を第一位に置くもよい。純美感を第一にするもよい。あるいは人間の機微きびに触れた内部の消息を伝えた作品を第一位に据すえてもよい。あるいは平々淡々のうちに人を引き着ける垢あかぬ抜けのした著述を推おすもよい。猛烈なもので、沈静なもので、形式の整ったもので、放縦ほうじゆうにしてまとまらぬうちに面白味おもしろみのあるものでも、精緻せいぢを極きわめたものでも、一気に呵成かせいしたもので、神秘的なものでも、写実的なものでも、臃おぼろのなかに影を認めるような模糊もこたるものでも、青天白日の下に掌たなごころをさすがごとき明瞭めいりょうなものでもいい——。相当の理由



があつて第一位に置かんとならば、相当の理由があつて等差を付するならば差支さしつかえない。たゞしできるかできぬかは疑問である。

これ等の条項に差等をつけると同時にこれ等の条項中のあるものは性質において併立へいりつして存在すべきも、甲乙と従属せしむべきものでないということに気がつくかもしれぬ。しかもその併立せるものが一見反対の趣味で相容あいれぬという事実も認め得るかもしれない——批評家は反対の趣味も同時に胸裏に蓄たくわえる必要がある。

物理学者が物質を材料とするごとく、動物学者が動物

を材料とするごとく、批評家もまた過○去○の文学を材料として以上の条項とこの条項にしたがって起る趣味の法則を得ねばならぬ。されどもこの条項とこの法則とは過去の材料より得たる事実を忘れてはならぬ。したがって古ふるきに拘こ泥うしてあらゆる未来の作物にこれ等を応用して得たりと思ふは誤りである。死したる自然は古今ほんこ来を通じて同一である。活動せる人間精神の発現は版行で押したようにはゆかぬ。過去の文学は未来の文学を生む。生まれたものは同じわけには行かぬ。同じわけにゆかぬものを、同じ法則で品ひん隲しつせんとするのは舟を刻んで剣を求むるの

類である。過去を総合して得たる法則は批評家の参考で、批評家の尺度ではない。尺度は伸縮自在にして常に彼の胸中に存在せねばならぬ。批評の法則が立つと文学が衰えるとはこのためである。法則がわるいのではない。法則を利用する評家が変通の理を解せんのである。

作家は造物主である。造物主である以上は評家の予期するものばかりは拵こしらえぬ。突然として破天荒の作物を天降あまくだらせて評家の脳を奪うことがある。中学の課目は文部省できめてある。課目以外の答案を出して採点を求める生徒は一人もない。したがって教師は融通が利かなく

てもよい。造物主は白い鳥からすを一夜に作るかもしれぬ。動物学者は白い鳥を見た以上は鳥は黒いものなりとの定義を變ずる必要を認めねばならぬごとく、批評家もまた古来の法則したがに遵したがわざる、また過去の作中より挙あげ尽したる評価的条項以外の条項を有する文辭に接せぬとは限らぬ。これに接したるとき、白い鳥を鳥と認むるほどの、見識と勇氣と説明がなくてはならぬ。これができるためには以上の条項と法則を知らねばならぬ。知って融通の才を利かさねばならぬ。拘泥こうでいすればそれまでである。

現代評家の弊はこの条項とこの法則を知らざるにあ

る。ある人は煩悶はんもんを描かねば文学でないという。あるものは他にいかほどの採るべき点があつても、事件に少しでも不自然があれば文学でないという。あるものは人間交渉の際卒然として起る際きわどき真味まみがなければ文学でないという。あるものは平淡なる写生文に事件の発展がないのを見て文学でないという。しかして評家が従来しゆらいの読書および先輩せんぱいの薰陶くんとう、もしくは自己じこの狭隘きやうあいなる経験より出でたる一縷いちるの細長き趣味中に含まるるもののみを見て真の文学だ、真の文学だという。余はこれを不快に思う。

余は評家ではない。前段に述べたる資格を有する評家ではむろんない。したがって評家としての余の位地を高めんがためにこの編を草したのではない。時間の許すかぎり世の評家とともに過去を研究して、でき得るかぎりこの根拠地を作りたいと思う。思うに付いては自分一人でやるより広く天下の人とともにやるほうがわが文界の慶事であるからいのである。今の評家はかほどのことを知らぬわけではあるまいから、お互にこ<sup>り</sup>ようけん<sup>けん</sup>という見で過去を研究して、お互に得た結果を交換してしぜんとわが邦<sup>くに</sup>将来の批評の土台を築いたらよかろうと相談をす

るのである。実は西洋でもさほど進歩しておらんと思う。余は今日までに多少の創作をした。この創作が世間に解せられずして不平だからこの言をなすのでないのはむろんである。余の作物は余の予期以上に歓迎されている。たといいある人々から種々の注文が出て、その注文者の立場は余によくわかっている。したがってこれらの人に対して不平はなおさらない。だから余のいうことは自己の作物のためでないことは明かである。余はたゞわが邦未来の文運のためなのである。

(明治四〇・一・一 「読売新聞」)





日本文学電子図書館

---

作物の批評

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第5巻」角川書店

昭和42年10月10日 6版発行

---

日本文学電子図書館